

地域連携保育の教育的意義と課題

田口 鉄久

要旨

学校・園と地域はいつの時代も強く結びついてきた。しかしその様相は時代と共に変化する。近年では「地域に開かれた学校・園」、「地域と共にある学校・園」への転換が求められている。本研究では学校・園と地域との関係性の変化を概括したうえで、幼児教育・保育において現在どのような地域連携保育が進められているのか検討した。方法は地域連携保育事例を分類・整理し、その特徴や成果を考察する形をとった。

その結果、地域連携保育には ①地域の環境や自然、②地域の人々による祭りや活動、③地域の小・中・高・大学生・未就園児・年配者との交流、④園相互の交流、の4分野があった。また、内容の分析結果から、①連携に関わる人のすべてが育ちあう互恵関係に立つ取り組みにしておくこと、②精選すること、③地域の人的財産・物的資源を保育内容として生かすために工夫すること、が重要であると考察した。

キーワード： 地域連携保育， 人的・物的資源， 地域と共にある学校・園， 実践事例， 保育内容化

1. 研究の背景

1.1. 地域と学校・園の連携をめぐる状況変化

1.1.1. 教育の変化

戦後昭和期の学校は子どもの健全な成長を願い、保護者・地域・国の期待に応える教育の充実を目指して取り組んできた。保護者や地域は教師に信頼と期待を寄せ、学校に教育を全面的に委ねてきた。知識・技能の獲得に関する学びと集団規律の育成等について学校はその責任と役割を果たしてきた。

この時代においては家庭教育と学校教育には明確な区分が見られた。しつけなど基本的な生活習慣に係ることや地域・社会で暮らすことの基本については家庭教育がその役割を果たしてきた。

当時は地域・社会の教育も十分機能しており、地域の将来を担う子どもを近隣住民が温かくかつ厳しく見守ってきた。どの地域においても行事や祭りなども盛んであり、連帯意識は強かった。

1960～1970年代（昭和35～54年）は幼稚園・保育所の増加が著しい時代であった¹⁾。保育所保育、幼稚園教育においては将来学校へ位置づく子どもの保護・養育という考え方が強かった。保育所は働く保護者を支え、子どもを安全に守り育てる役割を、幼稚園は後の学校教育につながる幼児期の教育に取り組んできた。

当時の学校・園は保護者・地域に支えられ、それぞれの役割を果たしてきた。地域で育った子どもも多くは地域を担う人材として地域に貢献した。この時代、学校・園は「地域の学校・園」であ

った。

1.1.2. 社会の変化

戦後昭和期を通じて産業、経済は目覚ましい発展をとげ、家庭・地域・社会は大きく変化した。人々の生活は便利になり、生活も豊かになった。大人や若者は便利で豊かな生活の中で、ゆとりの時間を文化的活動、社会的活動へまわすことが可能になった。

働く世代は核家族を単位とし、年配世代は夫婦を単位とした家庭になり、多世代同居家庭は減少した。社会構造の変化によって女性の就労・社会進出が促進され女性が活躍する社会になった。

一方でかつては活気にあふれた農林水産業、鉱業等を中心とした地域は次第に過疎化に悩むようになった。地域を基盤としてきた小規模事業は整理・統合され、大規模・一極化する流れにある。地域の過去を支えてきた産業の衰退・変容が著しい。新たに大規模開発される住宅地域では若い世代が中心となり、地域の連帯は概して弱い。一人親家庭、非正規労働による家庭経済の困窮も表面化してきた。格差社会の中で苦しむ家庭に対して国の支援が行われようとしているが、十分とは言えない。地域の連帯・支援は弱体化している。

1.1.3. 子どもの変化

家庭の状況は安定し、豊かな社会の中で、物に満ちた生活を送るようになった子どもは従来とは異なった姿を示すようになった。

コンピュータゲームでつながり、TVを楽しみ、精巧で魅力的な玩具機器の遊びが中心になった。地域における異年齢の遊びは姿を消した。伝統的な遊びや集団の遊びは地域では見られない。自然や野山・川原で遊ぶ子どもの姿も少ない。かつては異年齢の仲間や地域の自然や文化から得ていたものを現代の子どもは失いつつある。その役割は学校・園が果たさなければならない現状にある。

1.1.4. 地域の教育・保育をめぐる課題

子育て観・教育観も多様化した。将来の社会を生き抜くためにわが子に確かな学力を身につけさせたいと願う保護者や個の能力発揮を願う保護者が増えた。個の尊重、子どもを大切にしようとする傾向の中、辛抱強い子、たくましい子が育ちにくくなったとも言われる。

都市部において就学前教育・保育施設は多様な形態を示すようになった。保護者は自らの教育・保育理念に従って、また働き方によって園を選択する時代である。「地域の園」の概念は一部では崩れかけている。

一方、人口減少地域の幼稚園・保育所は小規模化・統合の流れにあって、今後再編成の対象となる園も出ている。過疎化、広域化する地域にあっては地域概念にも変化が出ている。さらに、地域の就学前教育・保育を複雑化させているのが新たな制度による認定こども園への誘導施策である。地域の園となる可能性も大きいのが、一方で移行に際して地域の園を閉じることになる場合もある。

1.1.5. これからの教育・保育

国は少子化社会の課題に直面し、平成期に入ってから子育てしやすい社会をつくる取り組みに力を注いできた²⁾。2015年度（平成27年度）から実施になった「子ども・子育て支援制度」で

はすべての子どもの乳幼児期における教育・保育を受ける場の確保と、多様な子育て支援施策の実施、そして新たな教育・保育施設としての幼保連携型認定こども園への移行促進に踏み出した。

学校教育においても常に変革が求められてきた。それは平成期にはじまる体験重視のゆとり教育・生きる力を培う教育であり、その後続く確かな学力と活用力を培う基礎学力重視の教育である³⁾。学校5日制に関わって地域の教育力の再生について論議された時期でもあった。そして今、将来を担う子どもの育ちと地域の再生を同時に実現させようとする「地域と共にある」学校教育の時代に入った。教育を地域の人々と協働して行うことによって子どもの育ちと地域の活力を同時に創造しようとする考えである⁴⁾。

現代の教育課題の一つとして新たな視点による「地域との連携」が浮かび上がった。

1.1.6. 学校・園と地域の連携

幼稚園教育要領解説では、家庭との連携を基盤としつつ地域社会と連続性を保ち「自然、人材、行事、公共施設などの資源を積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫する」と述べる。「地域の文化や伝統に十分触れて、豊かな体験」をし、「自分たちの住む地域に一層親しみを感じる」ことをめざす⁵⁾。

また、現在検討が進められている教育課程企画特別部会では「社会に開かれた教育課程」の重要性を論議しているところで、「社会教育との連携を図り」、「学校教育を学校内に閉じずに」「地域の人的・物的資源を活用」することと述べる。2016年（平成27年）12月の中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」⁴⁾再では、これからの学校と地域の連携・協働の姿として（1）「地域とともにある学校」への転換、（2）「子どもも大人も育ち合う教育体制」の構築、（3）「学校を核とした地域づくり」の推進、をかかげる。このように、今後増々地域と連携した教育・保育が重視される時代に入った。

これらは主として義務教育である小・中学校教育に対する提言ではあるが、幼稚園・保育所・認定こども園における「地域との協働による幼児期の豊かな体験の充実」「小学校との円滑な接続」「就学前教育・保育相互の連携」なども含めた幅広い提言であることを理解して、就学前教育・保育においても積極的な取り組みをする必要がある。

本研究では就学前における地域連携の教育・保育としてはどのようなことが考えられるのか整理し、その教育的意義並びに課題について検討する。

1.2. 地域と関わる教育・保育・子育て支援の取り組みから

各地で地域と連携した教育・保育の取り組みが行われている。ここではその代表的な取り組みを文献から数件取り上げ、本研究との関係を考える。

1.2.1. おやじの会

渡部幸太郎は島根県出雲市立の幼稚園でおやじの会を発足させた⁶⁾。PTA 会長を経験したことがきっかけになった。「おやじならではの発想力や力強さ、ダイナミックさを取り入れ、子どもたちの幼稚園生活を今まで以上に楽しくしよう」とメンバーを公募、当初有志10名が集まり、後に

はさらに拡大した。主な活動内容は「巨大遊具の製作、タイムカプセルの製作、大自然を体験する大遠足、秋祭りでのおやじレンジャーショーや男焼きそばづくり」であった。地域の中で仕事を通じて多様な経験を有し、豊かな人脈を持ち、行動力のある「おやじ力」は「家庭・幼稚園・地域社会をつなぐキー」だと言う。

1.2.2. 子育て支援

「子育て支援」は近年はほぼすべての園で取り組まれるようになった。保育所・幼稚園・認定こども園の主たる役割は子どもの保育である。しかし、今や「子育て支援」も園や保育者の役割になってきた。このような取り組みが重視されるようになったのは、子育てに不安を持つ保護者がいても、必ずしも身内や近隣の人で支える状況が作れていないことによる。また、小さな子が関わって遊ぶ機会や安全な場がなくなってきたことにもよる。

子育て支援の場で保護者は保育者に子育てに関する相談にのってもらったり、保護者同士で子どもの育ちの状況を交流して安心したり、リラックスする姿が見られる。園が地域に開かれ、教育・保育・子育てのセンター的役割を担うようになりつつある。

1.2.3. 園の地域貢献

大阪府内の民間認可保育園（605 箇所）で組織する大阪府社会福祉協議会・保育部会では独自に養成する「スマイルサポーター」と称する相談員を配置して「子育て、介護、虐待、家庭内暴力、病気、仕事、障害などあらゆる問題解決に向けた支援・アドバイス・紹介・同行」を行う。多様な社会福祉事業を行っている連合体ならではの取り組みである。篠崎直人は「社会福祉法人は制度内の事業だけでなく、もっと社会還元に徹した活動を考える必要がある」⁷⁾ と言い、宮田裕司は「社会福祉法人は社会福祉事業のみを実施しているだけではだめであり、社会福祉事業の主たる担い手としてのふさわしい事業を行うことが求められている」⁸⁾ と言う。両者はいずれも社会福祉法人当事者であるがゆえに重い提言である。無論公立の園は地域のために貢献することは使命であると言ってもよい。

1.2.4. 伝統や文化を尊重する教育

北俊夫は「現行の学習指導要領の改善に当って（中略）我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育が必要である」と中央教育審議会の答申を引用して、「伝統や文化を尊重する教育」推進の必要性を説く⁹⁾。地域で育つ子どもはいずれ地域を担う人になる。自分の育つ地域の文化・歴史・自然・人・・・との良い関わりを通して地域へ親しみをもつ子どもを育てることが求められる。

1.2.5. 本研究との関係

上記では（1）地域の人が園へ協力する地域連携、（2）園が地域の保護者を支援する地域連携、（3）地域のすべての人を対象として園・福祉連合体が相談にのる地域貢献、（4）地域の文化・歴史・自然・人・・・の力を教育に生かすための地域連携があることを紹介した。

本研究では、このうち主に（4）の地域の文化・歴史・自然・人・・・の力を教育に生かすために、幼児教育・保育では何ができるのか、具体的な事例に基づいて、今後の地域連携の可能性を考える。

2. 研究の方法

平成27年2・7・10月、X県幼稚園・こども園協会研修会（カリキュラム委員会）「地域と協働して幼児の体験を豊かにする」分科会で各年度7名の委員（交代2名あり）が報告し、協議した21実践事例を、（1）幼児の体験を豊かにする「場面」、（2）幼児の体験を豊かにする「内容」、の2点で整理を試みた。なお各事例はA4用紙2枚分の記述である。

3. 結果と考察

3.1. 地域と連携して幼児の体験を豊かにする「場面」

21事例の内容を検討・整理することによって以下の4場面に類型化することが妥当と考えた。

①地域の環境や自然、②地域の人々による祭りや活動、③地域の小・中・高・大学生・未就園児・年配者との交流、④園相互の交流

現在幼児教育・保育として「地域との交流」活動は概ね上記のような4つの形で行われていると考えることができる。

3.2. 地域と連携して幼児の体験が豊かになる「内容」

21事例の内容の概要は以下の通りである。事例タイトル列にあるアルファベットは事例報告者のイニシャルである（本研究で使用する事例は提供者の了承を得たものである）。

3.2.1. 地域の環境や自然（5事例）

1. 「地域探検カルタをつくる」 5歳児18名、1月、OY

地域の公園や神社への散歩、集会所や公民館活動への参加、絵本にあるへんてこな動物を探しに行く、などの活動を行い、地域のことが話題になるようにしてきた。

「ふるさと三重かるた」で遊ぶ姿があった。みんなの住むK地区のカルタを保育者が2枚作って幼児に示した。その後、自由に地域探検カルタを作ることのできる場を準備した。「Hじんじゃ、あそばせてくれて、ありがとう」「こうしんさんにいて、やまがいっぱい、すべりやすかったよ」「しょうがっこう、ゆうぐがいったのしいね」などのカルタを幼児が作って遊んだ。後に行った劇の中でも発表した。

2. 「地域の田んぼへ出かける」 5歳児9名、5月、AI

ザリガニ釣りには何が必要か考え、竿・餌の準備をして釣れることを期待して出かけた。保育園児、地域の人にも声をかけてもらって嬉しい気持ちになった。

3. 「保護者と共に潮干狩りへ」 4歳児24名、6月、AT

保護者に貝が採れたことを伝え喜び合う。普段は自己主張の強いBも友達と協力してカニを捕まえる姿があった。

4. 「ザリガニ釣りに公園へ」 4歳児24名、9月、AT

地域の公園へ行き、ドングリ拾いやザリガニ捕りをする。途中で友達の家を紹介する、地域の人が声をかけてくださるなどの体験をした。

5. 「2園合同で地域の山道を探検」 5歳児27名、9月、TS

熊が出る？ヘビがいる？丸太で作ってある橋、山の空気、林の暗さを感じる。日常保育にはない体験や感動

を得る。

【考察1】

園から地域へ出向くことによって幼児は地域の環境や自然の中で楽しい遊びができることを知る。地域は楽しくて魅力のある場であることを知った幼児は、地域の自然や環境に親しみを持ち、将来にわたって地域を心のよりどころとして育つことが考えられる。子どもの心にもふりさをつくることにもつながる（事例3,4）。

遊ぶために必要な用具など、期待を持って準備したり作ったりする中でわくわくした気持ちになることができる。遊びのために目的をもって作り、準備することによって子どもは物を作る技能や物の性質に気づく。また、用具の使用方も身につける。かつての子どもは自身で遊びに必要なものを作った（事例2）。

自然等とのふれ合いでは日常の保育には無い体験や感動を得て、普段とは異なる自己の発揮がみられる。家庭によっては自然とのふれ合いをあまり意識しないところがある。大型ショッピングセンターやイベントに出かけることを楽しみにする家庭も多いのが現状である。自然にはそれに勝るとも劣らない感動や驚きがある。豊かな感性を培うことにもつながる（事例5）。

中でも（事例1）は地域での活動を保育へつなげ、地域教材を「保育化」しているところが特筆できる。この視点は今後の地域連携保育を考えるうえで重要なポイントとなる。

3.2.2. 地域の人々による活動や祭り（6事例）

6. 「PTA役員、老人会の人ともちつき」 5歳児23名、1月、YM

地域の方の協力で田植えをして育てたもち米を収穫した。かまどにせいろを載せ、蒸し、臼・杵でつく。幼児ももちつき体験をさせてもらい、もち取り粉を手につけ、もちを丸める。食紅を入れると赤くなり、味はどうなるのか盛んに話が交わされる。もちつきが幼児・保護者・老人会の交流の場となった。

翌日はもちつき、もちを丸めるところなどの絵を描き、話はずんだ。

7. 「地域の方の指導を受けてお茶をたてる」 5歳児15名、1月、AI

地域の方にお茶の稽古をしてもらおう。Aは以前から地域で知り合いのお茶の先生の話聞き、お茶をたてる係になった。Aは嬉しいのか、小走りになったりジャンプをしたりしていた。正座してお茶をたてる時、「背中をまっすぐにするともっとおいしくなるよ」とお茶の先生は優しくAの気持ちを落ち着かせてくださった。お茶を丁寧に友達や保護者へ運び、ゆったりとした雰囲気、行動できた。日々の保育とは異なる雰囲気の中でAの集中する時間になった。

8. 「茶摘み体験、食材になったお茶」 5歳児13名、5月、NC

持ち帰ったお茶は家庭で天ぷらにしてみもらったり、お茶にしたりして家族で楽しんだ。給食センターとの連携で、地域の食材（茶）を利用したメニューを出してもらおうことがある。

9. 「ここがサーサーヨの神社や」 4・5歳児13名、5月、TK

友達の家探しに出かけ、神社の境内で遊ぶ。地域の祭りについて教師や友達と話をする。地域の地図を描く活動につながる。

10. 「地域の和太鼓グループの演奏」 5歳児 13名、5月、NC

ソーラン節を聞いて「知ってる！」と言う幼児がいる。歌・三味線に合わせて太鼓を叩かせてもらう。後に運動会でソーラン踊り、太鼓（竹）を行うことにつながる。

11. 「くじら船の祭り」 4・5歳児 13名、10月、TK

祭りの主役となる大きな船を実感する、くじらの中へ入らせてもらうなどして、保存会の人とふれ合った。その体験をもとにドンドンと太鼓でリズムをうち、歌い、踊り、くじらになる幼児が出るなど、くじら船ごっこが園で展開された。

【考察2】

地域の人々によって伝統的な行事や祭り、日本の伝統芸能や文化を紹介してもらったり、指導してもらったりすることは日常の園生活とは異なり、新鮮で興味を引く。地域の人々の協力を得て行った活動体験が園で遊びとして取り込まれたり、行事活動等になったりするなど、幼児教育の内容となる（事例7, 9, 10, 11）。

地域の特産物・生産物を使った食の活動は子どもにふるさとの産業や生活を伝えることになる。その取り組みの中で、物がどのような過程を経て食品・商品として完成していくのか体験を通して理解するようになる（事例6, 8）。

幼児は園では保育者との関わりで、家庭では家族との関わりで育つが、これらの活動では地域の人々から声をかけてもらい、異なる人との関わりの中で人とつながる喜びを感じながら育つことになる（事例7）。

ここでも多くの活動が後の保育の中で「保育内容化」して、遊びや活動を豊かにしている（事例6, 9, 10, 11）。

3.2.3. 地域の小・中・高・大学生・未就園児・年配者との交流（7事例）

12. 「小学校5年生と節分豆まきをする」 5歳児 13名、2月、IM

鬼の登場に小5が幼児を守りながら、鬼を追い出すために豆をまく。

5年生が幼児に心の鬼を追い出すことについて語る。C「好き嫌い鬼がおる」小5「じゃあCちゃんは好き嫌い鬼を追い出したね。やったね」と笑顔で話す。

幼児は1年間のお礼を込めて、5年生へ歌のプレゼントをした。小学生は学校で入学を楽しみにして待つことを話した。

13. 「園児と未就園児+福寿会の人々との交流」 5歳児 17名、2月、IN

生活発表会で行った劇や合奏を見てもらい、皆で合奏をして楽しむ。

遊び会へ参加している未就園児に優しく声をかけて誘う姿あり、未就園児も保護者から離れ安心して参加する姿があった。

幼児は年配の方への気遣い（長生きしてほしい、ゆっくり休んでほしい、など）を示す一方、小さな子のがんばりを認めることもできた。園児・未就園児・保護者・地域の人々が一体となって楽しむことができた。

14. 「ふれ会いデーで未就園児とその保護者へ関わる」 4歳児 25名、2月、YY

普段は遊びが持続しないKが未就園児に「何という名前?」「手をつなご」と積極的に関わる姿があった。保護者からも「優しいね」と言われ、嬉しそうであった。

Mはブランコに乗ろうとする未就園児に鎖を持ってやって揺れないように支えた。保護者から「ありがとうね」と言われ、満足げであった。

教師も全体の場で伝え、クラスの皆で認め合った。

15. 「小学校6年生とペアを作って避難訓練をする」 4歳児10名、11月、AM

6年生が幼児の手をとり、津波回避のため、避難場所まで約2.6Kmを歩く。歩きながら幼児に「テレビは何が好き?」「幼稚園で何をして遊ぶ?」などと声をかけて緊張を解こうとする様子があった。国道を渡ったり、JRを越えたりして長い距離を歩くことができた。坂道で「歩けない」と言う幼児に対しては「がんばれ、お姉ちゃんが引っ張るから」と声をかける。一人っ子であるAはお兄さん、お姉さんに憧れ、頼る経験になった。

16. 「職場体験の中学生と虫取り」 4歳児10名、9月、HM

中学生が捕ったトンボを幼児にそっと持たせてやる。「これはアキアカネって言うんだ」などと優しく教えてくれた。幼児期を懐かしむ中学生の姿がある。

17. 「大学生と一緒によさこいを踊る」 5歳児9名、9月AI

恥ずかしがる幼児が「うんそう、いいよー」と言ってもらい、楽しみながら踊る姿が見られた。一方では教師を目指す大学生の学びにつながった。

18. 「小学3年生との交流ミニ運動会」 5歳児13名、10月、IM

じゃんけん遊びや混合リレーで負けても励ましてくれたり、トイレにスリッパを落として困っても拾って洗ってくれたりして、小学3年生が優しくしてくれた。負けても大丈夫、失敗しても大丈夫と思えるようになり、幼児の変容が見られた。

【考察3】

幼児は年長の人との関わりを通して優しさ、楽しさ、エネルギーを実感し、憧れや親しみをもつ。年長の人との関わりには新鮮さや意外性があり、より子どもの心をつかんだものになることが多い(事例12,13,14,15,16,17,18)。

また、すべての事例は幼児の学びであると共に、年長の人との学びにもつながり、相互に学び合いが生まれている。交流・連携は相互に得るものがあるという互惠関係に立つと認識することがこれからの取り組みとして、発展性・継続性のあるものになる(事例12,13,14,15,16,17,18)。

未就園児に対する優しさを発揮する幼児の姿もある。とくに幼稚園児の場合は0・1・2歳児とふれ合う機会が少ないこともあり、貴重な体験になっている幼児もいると考えられる(事例13,14)。

3.2.4. 園相互の交流(3事例)

19. 「幼稚園と保育所の交流」 5歳児13名、6月、IM

保育所交流で歌、リズム、ゲームを楽しんだ後、入り混じって好きな遊びをした。小さな子もいる保育園児との交流は不安になりがちなYにとっては安定できるものであった。

20. 「2園が合同で探検遊びをする」 4歳児10名、6月、HM

自然（ザリガニ、オタマジャクシ、タニシ、アマガエルなど）との触れ合いを通じた心躍る感動の積み重ねが地域を知ることにつながり、また両園の幼児のつながりにもなった。

21. 「合同保育で新しい仲間と関わる」 5歳児 27名、6月、TS

遊びの中でそれぞれ折り紙、ブロックで作ったものが偶然同じもの（魚）であったことから、新しい仲間としてつながった。

【考察4】

同じ地域の、異なる園に通う子どもが共に遊ぶことを通して、安心してつながり合う姿がみられる。就学に向けた仲間作り、園の統合に向けた子ども相互の交流が促されている。少子化、過疎化の中で園の統合・再編成が行われる時代である。幼児同士が互いに親しくなることによって、不安が軽減し、新たな生活への期待につながる（事例 19, 21）。

また、共通の地域、隣接の地域を知ることにもなっている（事例 20）。

4. 実施に当たった課題

幼児教育・保育のあり方と重ねて考えると以下の点が課題であると考ええる。

（1）連携分野は多岐にわたる。これらの価値ある取り組みの多くを追求しようとするとは散的にならざるを得ない。地域連携の中で精選し、計画的に取り組むことが必要になる。

（2）教育・保育は将来の地域を担う人を育てるとの観点に立って、学校・園と地域が無理の無い共通テーマでつながり合う関係を作り出す必要がある。

（3）事例では明確になっているが、地域の人々や児童・生徒・学生との連携活動は園児のみならず相互の学び合いである。その意識が、真の交流・連携になることの相互理解が必要である。

5. まとめ

本研究では幼児期において地域連携保育はどのように実施されているのか、事例に基づいて分析を行った。その結果①地域の環境や自然、②地域の人々による祭りや活動、③地域の小・中・高・大学生・未就園児・年配者との交流、④園相互の交流、の4分野の連携があった。それぞれにおいて考察を行い、地域連携保育は日常の幼児教育・保育だけでは培うことのできない体験や人との関わり、保育内容を豊かにする“教材”であることが明らかになった。幼児、地域の実態に合わせて内容を精選して取り組むことによって今後めざそうとする「地域と共にある園」になる。園児は地域の自然、文化、歴史、資源、環境、人材などから学びを得る。一方では地域の人々は子どもから元気・生き甲斐・学びを得ることができる。相互に学び合うことを通じて活力のある地域の創造につながる。

引用文献

- 1) 森上史朗 (監) (2016) : 『最新保育資料集』, ミネルヴァ書房, 8, 26.
- 2) 北川公美子 (2009) : 特別保育の理念と実際, 『保育原理』柴崎正行 (編), 同文書院, 161.
- 3) 西山薫 (2008) : 今日の教育を考える, 『幼児教育の原理』菱田隆昭 (編), みらい, 160・162.
- 4) 中央教育審議会 (2015) : 『新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について (答申)』, 文部科学省.
- 5) 文部科学省 (2008) : 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 217-219.
- 6) 渡部幸太郎 (2013) : おやじ力のススメ, 全国国公立幼稚園長会『幼稚園じほう』(平成 25 年 2 月号), 全国国公立幼稚園長会「時報部」, 24-26.
- 7) 宮田裕司 (2014) : 地域にあることの意味を再考する, 全国社会福祉協議会『保育の友』(平成 26 年 2 月号), 全国社会福祉協議会出版部, 22-25.
- 8) 篠崎直人 (2014) : 住民の生活支援に取り組む保育園の地域貢献事業, 同上書, 18-22.
- 9) 北俊夫 (2013) : 伝統や文化を尊重する教育活動の進め方, 文部科学省『初等教育資料』(平成 25 年 3 月号), (株)東洋館出版社, 6-11.

執筆者の所属と連絡先

所属 : 鈴鹿大学短期大学部 Email: taguchit@suzuka-jc.ac.jp

Educational Goals and Challenges of Preschool Teaching Based on Interactions with the Community

Tetsuhisa Taguchi